

第2章

トルコにおけるナームス（性的名誉）への視点：最近の研究動向

村上 薫

要約

本稿は、トルコにおけるナームスにかんする研究の動向を整理する。ナームス（namus）は、狭義には親族の女性のセクシュアリティの保護／管理を通じて維持される、個人や集団（家族・親族、村、民族など）の名誉を意味する。名誉の犯罪にたいする国際的な注目の高まりを背景として、2000 年代以降、ナームス殺人や処女検査が社会問題化すると、研究の蓄積が開始した。研究者の中心的関心はナームス殺人であり、その立場は近代化改革の徹底によってナームス殺人は克服可能とするものと、国家はナームス殺人を「伝統的なもの」と位置づけることでむしろそれを存続させたとするものに大別される。しかしナームスは殺傷に関係するだけでなく、人々の日常的な行動に制約を課し、またジェンダー・アイデンティティとも密接に関係している。今後はこうしたナームスの日常的な実践についても検討する必要がある。

キーワード：トルコ、ナームス（性的名誉）、慣習、女性、セクシュアリティ

はじめに

本稿は、トルコにおけるナームスにかんする研究の動向を整理する。トルコ語でナームス（namus）とは、狭義には親族の女性のセクシュアリティの保護／管理を通じて維持される、個人や集団（家族・親族、村、民族など）の名誉である。ある女性のナームスは、彼女の家族や親族全体のナームスでもあることになる。これにたいし広義のナームスは、正直さや、人の道にかなっていることやそのことによって尊敬されること、自尊心を含むとされる[Meeker1976, 松原 1986, Parla2005]。類似の概念は中東・南アジアをはじめ多くの社会で観察される¹。

¹名誉の研究として、Peristiany[1966]に代表される 1960～70 年代の「地中海人類学」によ

ナームスにかんする研究は、少数の人類学的研究に限られていたが²、2000年ごろを境に徐々に蓄積が進んでいる。背景には、名誉の犯罪にたいする国際的な関心の高まりや、EUが人権問題の解決を加盟の条件としたことを背景として、ナームスを理由とする殺人（ナームス殺人）や処女検査がマスメディアや人権団体、フェミニスト研究者の注目するところとなり、議論が活発化したという事情がある。ただし、新聞の社会面に連日のようにナームス殺人の記事が載る状況を考えれば、ナームスにかんする研究はまだあまりにも少ないように思う。以下では、そうした限られた研究について、ナームスを問題化する視点に注目しつつ、紹介していくことにする。

I 近代化の徹底による暴力の克服

上述した経緯からも容易に想像されるように、ナームスを取りあげる最近の研究は、調査報告的な性格のものを含めるなら、ナームス殺人にかんするものが多い。ナームス殺人（*namus cinayeti*）とは、親族女性のナームスを傷つけられた男性が、自身や家族のナームスを回復する手段として、不道德な行為に及んだ女性や相手の男性を殺害するというものである。不道德な行為とは、婚前の性関係や妻の不貞などであるが、男性と電話で話した、あるいは付き添いなしに男性と言葉を交わしたことが疑われただけで殺傷にいたることもあり、多様である。ナームス殺人の具体的な事例については、たとえば受刑者へのインタビューをもとに殺人にいたるまでの過程を再構成した Onal[2008]、ガジアンテプ市役所の法律顧問として勤務した経験をもつ弁護士が判例をもとに事例を紹介した Yirmibeşoğlu[2007]、新聞記者がウルファでの取材をもとに事例を紹介した Faraç[1998]などが参考になる。

やや古いデータだが、内閣府がまとめた報告書によれば、2003年～07年の全国の「慣習（*töre*）またはナームスを理由とする殺人事件」の発生件数は、03年に159件で、その後は07年まで毎年200件余りで推移している[IHB2008]。ただし、この種の統計的なデータを扱う際には、ナームスを理由とする殺人（自殺の強要を含む）であっても、自殺や事故として処理されるケースがあることを考慮すべきである。また、後述するように、ナームス殺人と慣習による殺人を区別する、あるいはナームス殺人を慣習による殺人と嫉妬による情熱殺人に分けるといった、定義の混乱——背景にはナームス殺人を問題化する視点の違いがある——があることにも注意すべきである。

る「名誉／恥」研究がある。宇田川によれば、これは先進的な西洋社会の代表を自負するアングロ・サクソン系人類学者がヨーロッパ人類学の独創性を主張する手段として、中東・アフリカまでを含む「地中海」のカテゴリを創りだし他者化するという植民地的な構図にもとづいていた。そこでは「名誉／恥」は「遅れた」地中海ヨーロッパ社会の象徴とされた[宇田川 2007]。

² Meeker[1976]、Delaney[1991]、中山[1999]などがある。

ナームス殺人は、アナトリアの東部（東南アナトリア地域および東アナトリア地域）や、大都市の東部出身者のコミュニティで多いと言われる。（ただし上記の内閣府報告書によれば、イスタンブール、アンカラ、イズミルの三大都市を擁するマルマラ、中央アナトリア、エーゲの各地域の合計が全体の 64%を占め、東南アナトリアと東アナトリアの二地域の合計は 22%にとどまる[İHB2008]。）東部は国内でもっとも開発が遅れた地域であり、とりわけ東南アナトリア地域はクルド系住民が多く部族主義が残ると言われる。そのためナームス殺人は低開発や後進性と結びつけて説明されるだけでなく、しばしばクルドの問題として、また東部の封建的な部族主義的社会の問題としてエスニック化され地域化されて語られる傾向がある。一部のフェミニストやマスメディアが、ナームス殺人を慣習殺人（töre cinayet）と呼ぶ背景には、こうした理解がある。（ちなみにナームス殺人の防止や被害女性の保護を担当する家族・社会政策省は、「慣習とナームスによる殺人」（töre ve namus cinayetleri）という表現を用いている。）

ナームス殺人の原因を社会の後進性に求める見方によれば、ナームス殺人は教育や法制度が遅れているために引き起こされる。たとえばトルコの刑法は、2005 年に改正されるまで、ナームスを理由とする殺人は減刑していたが、そうした条項を改めることによって、ナームス殺人は克服できると考えられたのである³。国際機関や政府の調査報告書の多くはそうした見方に立つ。たとえば、国連人口基金および国連開発計画の支援を受けてトルコ人口学会が実施した東部の三都市（アダナ、ウルファ、バトマン）およびイスタンブールの住民およびNGO関係者へのインタビュー調査にもとづくKardam[2005]は、住民がナームス殺人を受け入れているという調査結果を受けて、ナームス殺人防止のためのシェルター増設など対症療法的な戦略とともに、長期的には家族や社会における女性の地位を向上させるために、女性自身が人権や早婚・強制結婚の弊害、家族とのコミュニケーションの方法などを学習し、権利意識と自己決定能力を高めることが必要だとしている。

ナームス殺人を後進性と関連づける学術的な研究としては、ハジェッテペ大学の政治学者らによる Ince et al[2009]がある。著者らは、ナームス殺人を個人が決断し殺害に及ぶ行為と定義し、家族議会（family council）で話し合い年長者が殺害と実行者について最終的な決断を下す慣習殺人（customary killing）から区別する。慣習殺人は、ナームスを購うための行為ではなく、従属的な地位や自己決定を禁じられることに反抗する女性の処罰であり、家父長制に由来するものである。したがって慣習殺人を防止するためにはフェミニストが主張する法制度の改正だけでは不十分であり、文化・政治・経済的な改革、すなわち（前近代的制度としての）家父長制の改革が必要である。オスマン帝国末期に始まる近代化改革は女性の地位改革をはかり、近代家族という新たな家父長制の

³改正前の刑法の問題点についてはたとえば KSSGM[1999]がある。

導入である点で限界があるものの、女性の公的領域へのアクセスを可能にした点は評価できる。しかし改革は都市中心で、農村部の女性は古い家父長制とともに取り残され、これが慣習殺人を存続させているという。すなわち、慣習殺人はトルコの近代化改革の不足によって引き起こされているのである。

II 近代／伝統二元論への批判

トルコにおける近年のナームス研究の柱のひとつは、以上で述べたような、ナームスを理由とする暴力の原因を後進性と求める見方を再考するというものである。そのような研究はいずれもナームスを理由とする暴力を、近代／伝統の二元論でとらえることを批判する点で共通している。以下では三つの研究を紹介しよう。

ひとつめは社会学者でフェミニストの Parla による処女検査にかんする研究である。Parla[2001]は、処女検査が近代国家による女性のセクシュアリティの統制管理であり、近代的な制度的暴力であることを指摘した。処女検査とは、明確な法的根拠を欠いたまま、非合法的売春の疑いをかけられた女性、「不謹慎な」行為に及んだ女性政治犯や、国が運営する施設（児童保護施設や学生寮など）の入所女性にたいして経常的に実施されていたもので、女子高校生にたいして適用されることもあったという。1990年代はじめに、素行を疑われ検査を強要された女子高校生が自死する、あるいは家族によって殺される事件の報道が相次ぎ、検査の実態が明らかになると、国内外の人権団体やフェミニスト活動家らから激しい抗議が起こった。

政府はようやく 1999 年に省令によって検査を制限したが、Parlaはこの間の処女検査の是非をめぐる論争を分析し、次のように論じている⁴。すなわち、「公序良俗」を乱した女性に国家が処女検査を強制することについて、世論は「名誉や貞操といった伝統的価値を守るためには許容すべき」とする賛成意見と「近代化がいまだ達成されていない」とする反対意見に割れたが、いずれも伝統と近代の二項対立的思考の平面上にある点で共通していた。Parlaは、処女検査をめぐる論争が伝統／近代の二項対立的思考の枠内で展開されることの含意を、近代化プロジェクトにおけるジェンダー化された市民概念の形成という歴史的文脈に照らすことによって明らかにしようとする。すなわち、アタテュルク（独立戦争の英雄で初代大統領）らナショナリスト・エリートが進めた近代化プロジェクトにおいては、新しい女性はヴェールをはずし公的な場に登場する存在、つまり近代的だが純潔という「伝統的価値」を守る存在であることが求められた。これは、ナームスは否定されず、ヴェールをはずしてなお守られる純潔という新しい意味を与えられたことを意味する。パルタ・チャタジーが論ずるように、非西洋社会は西洋とは異

⁴処女性規範に関係する医療行為には、処女検査のほかに処女膜再生手術がある。処女膜再生手術については Cindoglu[1997]を参照。

なるがモダンであることを示すため「伝統」を必要とするのである。

ここで Parla は処女検査を擁護する保守主義政党出身の女性問題担当大臣と、処女検査を非文明的であり人権侵害であるとして批判するフェミニストの大臣補佐官の論争を、読み解いてみせる。Parla によれば、大臣の伝統擁護論はこうした近代化プロジェクトが抱える矛盾の表れであって、進歩的なものと後進的なものを想定するという点で、補佐官の伝統克服論と同一のパラダイムのなかにある。さらに、国家は女性の私的生活から手を引くべきだという補佐官の主張と、国家は伝統の庇護者であり、従って女性のセクシュアリティの庇護者でもあるとする大臣の主張は一見相反している。だがここでも両者の見解には共通点がある。すなわち、補佐官は女性の処女性を国家が管理することには反対するが、国家の真の責任は女性を正しい市民の在り方に導くことにあると考えている。他方、大臣も、「遅れた東南部」では不貞を犯した女性が親族男性に殺されるのはナームスを守るためだが、国家は家族を守るために罰するのだと述べ、処女検査を近代国家の役割として位置づけている。二人は、国家が家族や女性という問題領域に介入することを、近代国家としての責任としてとらえる点で一致するのである。以上から、処女検査は伝統の存続でも近代化の不足でもなく、かつて親族ネットワークが担った女性の貞操管理を近代国家が肩代わりしたものであり、その意味で近代的な暴力であるということが明らかとなった。

Parla は処女検査を事例として、ナームスを理由とする暴力はすぐれて近代的なものであるとしたが、Parla と同世代の若手社会学者である Koğacioğlu は、ナームスを理由とする暴力の存続は、伝統そのもの以上に、近代的政治的制度による「伝統的なもの」の再生産によって支えられていることを明らかにした[Koğacioğlu 2004]。

Koğacioğlu もまた Parla と同じくチャタジーを引き、ポストコロニアル社会は西洋化しつつユニークな民族性を維持することを課題とし、そのため女性を公的領域で解放する一方、私的領域には手をつけなかったことが、ナームス殺人が放置された背景にあると指摘する。そして、ナームス殺人がその後もなくならず続いてきたしくみを、ミシェル・フーコーの権力論を援用しつつ次のように説明する。すなわち、法、人権、フェミニズム、マスメディア、EU、トルコ国家といった近代的政治的制度が「ナームス殺人は伝統的なものだ」と発話すると、そこで「伝統的なもの」が再生産される。するとナームス殺人は（伝統的なものである以上）起きることが自然で当然のことにように見えてしまい、ナームス殺人の存続が許されてしまう。だが「伝統的なもの」と発話する行為は、その他者として「モダンなもの」を同時に生産するために、近代的政治的制度が「伝統的なもの」を生産していることは見えにくくなる。近代的政治的制度は伝統とは無関係かむしろそれと対峙しているかのように見えてしまうのである。「暴力は伝統のせいだ」と発話したとたんに、暴力が自然化され、伝統の再生産を可能にしてしまうことを、Koğacioğlu はティモシー・ミッチェルの「国家作用 (the state effect)」のひそみにならい、

「伝統作用 (the tradition effect)」と名づけている⁵。

Parla[2001]や Koğacioğlu[2004]とは異なる視点から、やはりナームス殺人の言説における伝統／近代の二項対立的思考の問題を指摘したのは、Ecevitoglu and Aytaç[2007]である。著者らも Koğacioğlu[2004]と同じく、ナームス殺人の語りでは、犠牲者の娘、銃の引き金を引く弟、鬼のような母、冷酷な父、遅れた社会といったイメージが提示されるが、これによって、対極的なモダンなイメージ—優しい母、民主的な父、友達のような弟、進歩的／文明的／国家制度の存在する社会—が同時に喚起されると指摘する。

こうした二項対立的な思考の枠組みにおいては、たとえば恋愛した女性がナームスを理由に親族に殺されることは、利害関係にもとづいて親族が結婚を決定するナームスのレジームと、感情にもとづいて個人が結婚を決定する近代家族のレジームという、二つの異なる社会統制レジームの衝突として理解されてしまう。近代的な社会であっても合法的な殺人はあるから（たとえば戦争）、恋愛した女性が殺されることを後進性や文明の欠如に短絡的に結びつけるべきではない。だが、恋愛を価値とする近代家族のレジームが普遍化された近代社会においては、恋愛にからんだ殺人は法的には処罰されるが社会的には共感される一方、ナームスを理由とする殺人、すなわちナームスのレジームのもとでの殺人は文明の欠落によるものと解釈され、しばしば特定のエスニシティ（クルド）と地域（アナトリア東部）に固有の問題とみなされ、教育や法を通じて近代社会に統合する対象として他者化が起きるのである。

ナームス殺人の言説において、慣習殺人とそれ以外を近代社会で普遍的にみられる情熱殺人とに区別する傾向は、強まっている。たとえば 2005 年に制定された新刑法は、「慣習による殺人」に終身刑を科したが、慣習殺人と判断するための要件を、家族議会 (aile meclisi) による殺人としている。だが著者らは、家族会議の決定やレイプされた女性が殺害の対象となるかどうかでナームス殺人の一部を慣習殺人として区別することには、弊害があるという。慣習殺人以外のナームス殺人は追究されなくなり、またナームス殺人をナームス殺人たらしめている共通要素、すなわち誰がなぜ殺したとしてもナームスの名のもとに殺人が正当化されるという事実が過小評価されてしまうからである。ナームスは、特定のエスニシティや地域に限定されずトルコ社会全体にかかわる価値である。にもかかわらず、近代／伝統の二元論のもとでナームス殺人が慣習殺人と言い換えられることによって、ナームスは議論されなくなってしまう⁶。

⁵筆者は未見であるが、Koğacioğlu[2011]は名誉殺人が慣習殺人と呼ばれエスニック化されることを問題化し、「慣習」の構築を論じている。この論文は夭折した著者の遺作となってしまった。

⁶昨年、共著者のひとり Ecevitoglu がアンカラ大学に提出した博士論文にもとづく [Ecevitoglu2012]が刊行された。筆者は未見だが、この本の中で著者は、ナームスを理由に女性が殺害されることが正当化されてしまう理由を、アガンベンの「剥き出しの生」の概念を参照しつつ考察している。

III 社会的構成としてのナームス

ナームスの暴力の原因を後進性に求める言説は、ナームスを社会の本質である、つまり変わることはないとしつつ、同時に近代化によりナームスの暴力的な側面は克服できる、つまり変えられるとする点で矛盾を抱えている。クルド民族運動をジェンダーの観点から分析した Çağlayan[2007, 2012]は、社会的構成としてナームスをとらえることで、近代／伝統の二元論に立つこうした支配的言説が抱える矛盾から自由にナームスを議論することに成功している。

Çağlayan によれば、19 世紀以来続いてきたクルド民族運動において、女性は民族の象徴や境界標識として位置づけられるのみであったが、1980 年代以降、非合法政党である PKK（クルド労働者党）のゲリラ活動や、合法的な市民社会組織活動に従事する女性が急増した。背景には、PKK が近代的なクルド性という新たな民族アイデンティティを確立するために、部族主義や家父長制を否定し、男女平等の理想にかかげたという事情があった。また、より現実的な事情として、長期の人民戦争を戦い抜くには女性を動員する必要があるが、女性のセクシュアリティの保護を規範とするナームスの理解がその障壁となった。Çağlayan によれば、こうした要請に応えるためにアブドゥッラー・オジャランら PKK 指導部が行ったのが、ナームスを再定義することであった。オジャランは著書などを通じて、従来の家父長的な「古い家族」においてナームスは女性の身体とセクシュアリティを意味したこと、しかし近代的なクルド社会においては、ナームスとは何よりも「祖国」を守ることによって購われると述べる。そして、女性の身体とセクシュアリティの管理にのめり込むあまり、「祖国」がトルコ国家にレイプされるのを許してはならないという論法で、女性の身体とセクシュアリティの管理にたいしむしろ否定的な、新しいナームス概念を正当化した。ここで起きたのは、ナームスの政治化と手段化であり、(男性)指導者たちにより都合のよいものへの書き換えであった。Çağlayan の議論は、ナームスが文化の不変の本質ではなく、政治的に構想された（つまり可変的な）文化的カテゴリであることを明らかにするものである。

ナームスを社会的構成としてとらえ、政治的経済的変化のもとでの変容を指摘した研究として、ミドルクラスの家庭で通いの家事労働者として雇用される都市貧困層出身の女性を調査した Ozyegen[2001] および Bora[2005]がある。この二つの研究はいずれも、労働が母親役割の延長と見なされ、働きに出た先の家庭で自分のナームスを守ることを通じて母親としてのジェンダー・アイデンティティが強化されたと指摘している。いずれもナームスを正面からとりあげる研究ではないが、ナームスに新たな意味が盛り込まれる過程で、現金収入の必要性、女性の家外の活動を制約するナームスの規範、自分の家庭の家事や育児がおろそかになることへの負い目といった、さまざまな事情に折り合

いがつけられる様子が具体的に描かれており、興味深い。

筆者も以前、1990年代以降、大都市の周辺部で急増した輸出向けアパレル産業の女子労働について、女性が工場労働に吸収される過程で、女性の家外活動を阻害していたナームス概念が、新たな内容を盛り込まれ再編される過程に注目したことがある[村上2005]。グローバルな生産委託ネットワークの末端に位置する零細縫製工場の経営者は、労働需要の変動に対応可能で安価な女子労働力を確保したいが、地域社会の人々は現金収入を必要としつつも娘が就労すればナームスが傷つくのではないかと恐れていた。一方、娘たちは家の外に働きに出ることで自律の領域を広げることが望んだ。結局、工場経営者が親がわりとなって職場の内外で娘たちのセクシュアリティを管理することで、娘たちの就労が可能となった。三者がそれぞれの思惑をもってナームスの規範を交渉し妥協した結果、新しいナームスの解釈が地域社会で形成されたのである。

IV ナームスと近代家族イデオロギー

トルコでは、近代化改革期に、対等な男女が愛しあって家庭をつくる近代家族の理想が導入された。他のポストコロニアル社会⁷におけるのと同様、近代性が近代／伝統の二分法的な発想で理解された結果、トルコにおいても近代ヨーロッパの家族に範をとる愛情で結ばれた夫婦家族が近代的なものとされ、親族関係や親族関係の結合を支えるナームスの概念は伝統的なもの、すなわち遅れたものと位置づけられてきた。しかし実際には近代家族の理想の浸透のしかたは複雑であった。近代化改革の担い手であり、近代家族の理想を内在化させたミドルクラスにあってなお、夫婦間の愛情が重視される一方で、核家族を超える（擬似的な関係を含む）親族関係にもとづく共同体的な関係が人々の紐帯の土台として重要であり続けてきたことが、人類学的な研究によって指摘されてきた[Olson1982, Duben1982, Kandiyoti1982, Kağıtçıbaşı1982]。以上の知見は、親族やナームスを前近代的あるいは本質的なものではなく、人々が近代化プロジェクトに巻き込まれる過程で再構築されたものとして把握する必要性を示している。別の言い方をするなら、親族関係の衰退から近代家族の確立へという近代化論的な発展の構図を描くのではなく、親族関係の価値と近代家族の価値とが当該社会にいかに埋め込まれているか、という視点が必要とされる。

トルコの家族研究は、フェミニズムの影響のもとで研究者がジェンダー研究に吸収されたこともあり、人口学的研究をのぞき、ごく限られている。ジェンダー研究は豊かな蓄積があり、すぐ後で述べるようにナームスに関する研究も始まっている。しかしその

⁷本稿において「ポストコロニアル」の概念は、ホールの議論[Hall1996]を踏まえたシルマンの用法[Sirman2004]にならい、社会関係や文化概念が、より発展したと考えられている(端的には西洋世界における)諸社会・文化との比較によって形作られるような、社会的政治的文脈を指している。

いずれにおいても、近代家族的な価値とナームスの関係が問われることはほとんどない。例外的な研究は、近代化改革期の小説を素材として人類学的考察を行った[Sirman2004]である。近代化の過程では、夫婦家族が育む愛情は、彼／彼女の個人的な感情にもとづいて行動する自律的で自己監視する主体を生み出した。この過程で、愛情は、親族関係の絆であるナームスに置き換わるはずだったが、しかし実際にはこの置換は起きず、オスマン国家の構成要素である親族集団や「家」(household)が、国民国家の構成要素である民族と家族に置き換わっただけで、ナームスの影響は存続した。今日のトルコ社会でジェンダー・アイデンティティがナームスの概念によって規制されているのは、こうした背景によるという[Sirman2004]。

おわりに

本稿はトルコにおけるナームスにかんする研究の動向を整理した。ナームスにかんする研究はまだ緒についたばかりであり、蓄積は少ないが、その中でも中心的なテーマや視点があることを確認した。研究者の主たる関心はナームス殺人にあり、近代化改革の徹底によってナームス殺人は克服可能という支配的言説の批判的な分析を柱のひとつとしている。これらの研究はいずれも伝統／近代の二元論によるナームス殺人の理解を批判する点で共通する。このほかにナームスを社会的構築としてとらえその変容過程に注目する社会構築論的なアプローチ、および家族関係の近代化とナームスの関係を考察するモダニティ論的な研究がある。

ナームス殺人という深刻な暴力の防止は喫緊の課題であり、研究者の関心がそこに向けられることは当然のことだろう。そのことを踏まえたうえで、今後の課題をあげるなら、ナームス殺人という問題にとりくむためには、ナームス殺人の言説の批判的な分析とあわせて、ナームスを理由とする日常的な暴力やナームスの保護を通じたジェンダー・アイデンティティの獲得といった問題を具体的な関係性のなかで考察する作業が必要だと考える。

ナームスは、女性とその身体を管理する方法に関係する価値システムであり、ナームスをめぐる規範は、どのような服装をすべきか、誰と社交すべきか、どこまでなら女性一人で出かけられるか等、日常生活についてのさまざまな規則や制限を含んでいる[Sirman2004]。殺傷に至らない、日常的な小さな暴力に注目することは、ナームス殺人を慣習殺人と呼び、潜在的な実行者と被害者を他者化する見方に与せず、ナームス殺人を日常の延長に位置づけることでもある。また、ナームスは、その意味するところが変化し、今日ではより個人的なものを喚起するようになったとしても、とりわけ農村や都市下層社会に生きる人々にとって、ジェンダー・アイデンティティや社会的帰属を獲得するしくみとして重要であり続けている。クルド系住民が多く住むイスタンブールの低所

得地区で調査を行ってきた社会学者の Üstündağ は、単にナームスを理由とする暴力を否定するなら、それは彼女たちのアイデンティティを奪うことでしかないとする [Üstündağ 2007]。黒海地方の農村で調査した人類学者の中山もまた、女性のセクシュアリティの管理は抑圧的な側面だけでなく、夫婦間の絆の強化など保護的な側面を含んでいると指摘し、「様々な要素を含んで循環する装置の一環」としてとらえるべきだと主張している [中山 2005]。ナームスの意味や役割を、家族など具体的な関係性のなかで明らかにする作業を通じて、ナームスのいわば負の側面とともに、そうした保護的な側面にも光を当てることが、暴力の問題を考える上で重要だと考える。

参考文献

[日本語文献]

- 宇田川妙子 2007 「地域の『門番』概念としてのジェンダー・セクシュアリティ——地中海ヨーロッパ」 宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社。
- 中山紀子 1999 『イスラームの性と俗——トルコ農村女性の民族誌』アカデミア出版会。
- 2005 「夫婦関係を盛り上げる仕組み——トルコ西黒海地方の農村の事例を中心に」 加藤博編『イスラームの性と文化』（イスラーム地域研究叢書第6巻）東京大学出版会。
- 松原正毅 1986 「価値観と評価——トルコ社会におけるナムスをめぐって」『イスラム・価値と象徴』（講座イスラム4）筑摩書房。
- 村上薫 2005 「トルコの女性労働とナームス（性的名誉）規範」 加藤博編『イスラームの性と文化』（イスラーム地域研究叢書第6巻）東京大学出版会。

[外国語文献]

- Başbakanlık İnsan Hakları Başkanlığı (İHB) 2008 *2007 Töre ve Namus Cinayetleri Raporu: Sessizliğimizi Duyan Var mı?* (慣習およびナームスの殺人についての報告：私たちの声なき声が聞こえる人はいるか?), Ankara: Başbakanlık İnsan Hakları Başkanlığı.
- Bora, Aksu 2005 *Kadınların Sınıfı: Ücretli Ev Emeği ve Kadın Öznelliğinin İnşası* (女性たちの階級：有償家事労働と女性の主体性の形成), İstanbul: İletişim Yayınları.
- Çağlayan, Handan 2007 *Analar, Yoldaşlar, Tanrıçalar: Kürt Hareketinde Kadınlar ve Kadın Kimliğinin Oluşumu* (母、同志、女神：クルド運動における女性と女性アイデンティティの形成), İstanbul: İletişim Yayınları.
- 2012 “From Kawa the Blacksmith to Ishtar the Goddess: Gender Constructions in

- Ideological-Political Discourses of the Kurdish Movement in post-1980 Turkey,” *European Journal of Turkish Studies* [Online], 14. (<http://ejts.revues.org/4657> 2013 年 2 月 11 日 閲覧。)
- Cindoglu, Dilek 1997 “Virginity Tests and Artificial Virginity in Modern Turkish Medicine,” *Women’s Studies International Forum*, 20(2).
- Delaney, Carol 1991 *The Seed and the Soil: Gender and Cosmology in Turkish Village Society*, Berkeley : California University Press.
- Duben, Alan 1982 “The Significance of Family and Kinship in Urban Turkey,” in Çiğdem Kağıtçıbaşı(ed.), *Sex Roles, Family and Community in Turkey*, Bloomington: Indiana University Turkish Studies.
- Ecevitoglu, Pınar and Ahmet Murat Aytaç 2007 “Siyasal Bir Mesele Olarak Namus Cinayeti Tartismalari: Kim Medeni, Kim Barbar? (政治的問題としてのナームス殺人論：誰が文明的で誰が野蛮か?) ,” *Toplum ve Bilim*, 109.
- Ecevitoglu, Pınar 2012 *Namus Töre ve İktidar: Kadının Çıplak Hayat Olarak Kuruluşu* (ナームス、慣習、権力：剥き出しの生としての女性の形成) , Ankara:Dipnot Yayınları.
- Faraç, Mehmet 1998 *Töre Kısılcacında Kadın* (慣習という鉗子で掴まれた女性) , İstanbul:Çağdaş Yayınları.
- Goksal, Hayrunnisa 2008 *Women on the Margins of Life and Death: Honour Crime and Governmentality in Turkey*, VDM Verlag Dr.Müller.
- Hall, Stuart 1996 “When was the ‘Post-Colonial’? Thinking at the Limit,” in Ian Chambers and Lydia Curti (eds.), *The Post-Colonial Question: Common Skies, Divided Horizons*, London: Routledge.
- Ince Hilal Onul, Aysun Yarali and Dogancan Ozsel 2009 “Customary Killings in Turkey and Turkish Modernization,” *Middle Eastern Studies*, 45(4).
- Kadının Statüsü ve Sorunları Genel Müdürlüğü (KSSGM) 1999 *Töre Cinayetleri* (慣習殺人) , Ankara: Kadının Statüsü ve Sorunları Genel Müdürlüğü.
- Kağıtçıbaşı,Çiğdem 1982 “Sex Roles, Value of Children and Fertility”, Ç.Kağıtçıbaşı(ed.) *Sex Roles, Family and Community in Turkey*, Bloomington :Indiana University Turkish Studies Press.
- Kandiyoti, Deniz 1982 “Urban Change and Women’s Roles in Turkey: an Overview and Evaluation”, Ç.Kağıtçıbaşı(ed.), *Sex Roles, Family and Community in Turkey*, Bloomington :Indiana University Turkish Studies Press.
- Kardem, Filiz 2005 *The Dynamics of Honor Killings in Turkey: Prospects for Action*, Ankara: Population Association. (同時刊行のトルコ語版のタイトルは *Türkiye’de Namus Cinayetlerinin Dinamikleri:Eylem Programı için Öneriler*)

- Kogacıoğlu, Dicle 2004 “The Tradition Effect: Framing Honor Crimes in Turkey”, *Differences*, 15(2).
- 2011 “Knowledge, Practice, and Political Community: The Making of the ‘Custom’ in Turkey,” *Differences*, 22(1).
- Meeker, Michael 1976 “Meaning and Society in the Middle East : The Black Sea Turks and the Levantine Arabs (I),” *International Journal of Middle East Studies*, 7.
- Onal, Ayse 2008 *Namus Cinayetleri* (ナームス殺人) , İstanbul: İstanbul Kültür Üniversitesi Yayınevi.
- Ozyegin, Gul 2001 *Untidy Gender: Domestic Service in Turkey*, Philadelphia: Temple University Press.
- Olson, Emilie 1982 “Duofocal Family Structure,” Ç.Kağıtçıbaşı(ed.), *Sex Roles, Family and Community in Turkey*, Bloomington :Indiana University Turkish Studies Press
- Parla, Ayse 2001 “The ‘Honor’ of the State: Virginity Examinations in Turkey”, *Feminist Studies*, 27(1).
- 2005 “Honor: Turkey and Caucasus,” Suad Joseph et al eds.*Encyclopedia of Women and Islamic Cultures, Volume II Family, Law and Politics*, Leiden:Brill.
- Peristiany, Jean ed. 1966 *Honour and Shame: The Value of Mediterranean Society*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Sirman, Nükhet 2004 “Kinship, Politics, and Love: Honour in Post-Colonial Contexts—The Case of Turkey,” in Shahrzad Mojab and Nahla Abdo(eds.), *Violence in the Name of Honour: Theoretical and Political Challenges*, İstanbul: İstanbul Bilgi University Press.
- Üstündağ, Nazan 2007 “Toplumsallık, Şiddet ve Kadınlık İlişkisi Üzerine Bir Deneme (社会的なもの、暴力、および女性性の関係についての試論) ,” *Amargi*, 4.
- Yirmibeşoğlu,Vildan 2007 *Toprağa Düşen Sevdalar: Töre ve Namus Gereğiyle İşlenen Cinayetler* (埋葬された情熱：慣習とナームスを理由とする殺人) , İstanbul :Hürriyet Gazetesi.